大和田建樹作詞「旅泊」と唐張継「楓橋夜泊」

―明治唱歌による和洋中文化の融合―

丹羽博之

要旨

大和田建樹（たけき）作詞の明治唱歌「旅泊」は、海辺での仮泊の旅愁を歌った名品であるが、曲自体はイギリスの曲と言われている。更にその歌詞は、唐の詩人張継の七言絶句「楓橋夜泊」をそっくり利用している。曲は西洋、歌詞は漢詩の利用、歌うのは日本人。両者の比較を通して当時の東洋と西洋との文化の融合を考察する。

キーワード：大和田建樹　明治唱歌　楓橋夜泊

中年以上の世代にはなつかしい文部省唱歌。日本の美しい四季や自然、幼い日々を送った田舎の情景が歌われていることが多い。学校や家庭で唱歌を聞きながら育った世代には郷愁をそそられる。ところが、メディアの普及とともに音楽環境は激変した。最近はやりのJポップを心地よく聞ける古い世代は多くはあるまい。生まれた時から、幼児向けのテレビ・ビデオから流れるテンポの速い音楽に慣れ親しんだ今の子供には、唱歌のメロディは古臭くて感覚が合わないという。「村の鍛冶屋」といっても、そもそも鍛冶屋自体が村から姿を消してしまっており、生活習慣も急速に変化してしまった。勢い学校の音楽教育からも唱歌は徐々に姿を消している。

文部省唱歌に代表される唱歌は明治維新以後、西洋音楽の流入とともに生まれた。巷間では、大和田建樹・奥好義編の『明治唱歌』（明治二十一年の第一集から第五集の二十三年まで）等がよく歌われた。開国間も無い明治期のこと、曲の多くは外国からの借り物が多かった。「蛍の光」の原曲はメロディはスコットランドの民謡オールド・ラング・サイン（Auld Lang Syne）である。ところが、その歌詞には『蒙求』などの「孫康映雪、車胤聚蛍」（蛍雪之功）の有名な故事を巧みに取り入れている。西洋の曲に中国の故事を織り込んだ歌詞を付け、日本人が歌うという和洋中の文化が融合したものである。鳥居忱作詞・滝廉太郎作曲「箱根八里」、武島羽衣作詞・滝廉太郎作曲「花」等の人口に膾炙した歌詞の中にも漢詩の表現は濃厚に認められる。こうした和洋中の文化の融合した例は明治期の唱歌に多い。本稿では大和田建樹作詞の「旅泊」の歌詞と唐張継の有名な「楓橋夜泊」の漢詩を中心に考察する。

一

まず、明治唱歌「旅泊」を『日本の唱歌（上）』（金田一春彦―安西愛子編・講談社文庫）により、挙げる。

一

磯の火細りて　更くる夜半に
岩うつ波音　　ひとり高し
かかれる友舟　ひとは寝たり

たれにか　語らん　旅の心

二

月影かくれて　からす啼きぬ
年なす長夜も　明けに近し
起きよや舟人　遠方の山に
横雲なびきて　今日ものどか

（『明治唱歌（三）』明22・6）

同書の解説には

イギリスの曲という。大和田がそれに作詞したものであるが、舟旅に出た旅人の心細い気持、夜が明けてほっとする気持がよく出ていて、見事な歌詞である。『明治唱歌』で最初に出た芸術的な歌詞ではなかろうか。大和田の力量は十分にわかる。（中略）

ほかに「灯台守」という歌詞もあり、これは勝承夫氏の改訂したものが『五年生の音楽』に載った。

とある。

たしかに、首尾一貫した芸術的な見事な歌詞である。四国の宇和島出身の大和田建樹の瀬戸内海での舟旅の経験も背景にあるのかもしれない。原曲はイギリスの曲らしいが、曲名、作曲者は不明である。この曲は賛美歌にもあり、昭和十年代には教会で歌われていたということを三人の昭和一桁生まれの人から聞いた。但し、稿者が調べた限りの賛美歌には、見あたらなかった。賛美歌集も教会の派によって異なり、賛美歌も時代や場所によっても信者に好まれるよう様々な変遷があるようだ。

二、「楓橋夜泊」

蘇州寒山寺を詠んだ張継の「楓橋夜泊」はあまりにも名高い。この詩は中国でも愛唱されたが、現代日本でもＮＨＫの「ゆく年くる年」などで除夜の鐘として放映されて名高く、時代劇の床の間などの掛け軸としてかかっていることも多い。その昔の流行歌「蘇州夜曲」にも「鐘も鳴ります寒山寺」とあった。

楓橋夜泊　　張継

月落烏啼霜満天　月落ち烏啼きて　霜天に満つ
江風漁火対愁眠　江風漁火　愁眠に対す
姑蘇城外寒山寺　姑蘇城外の　寒山寺
夜半鐘声到客船　夜半の鐘声　客船に到る

秋の水辺でのしみじみとした旅愁が詠まれている。この詩は日本人にも愛読された『唐詩選』『唐詩三百首』『三体詩』にも収められており、張継はこの一首によって後世に名を残したと言っても良い。日本人にも愛された「楓橋夜泊」の詩句を大和田建樹は「旅泊」の中に巧みに利用している。以下に「旅泊」と「楓橋夜泊」の類似点を挙げる。

①「旅泊」→「夜泊」
②「磯の火」→「漁火」
③「ふくる夜半」→「夜半」
④「友舟」「舟人」→「客船」

⑤「ひとは寝たり」「旅の心」→「愁眠」
⑥「月影かくれて　からす啼きぬ」→「月落烏啼」
⑦「遠方の山」→「寒山寺」

「旅泊」が「楓橋夜泊」を粉本としたことは、一目瞭然である。特に「月影かくれて　からす啼きぬ」は「月落烏啼」をそのまま訓読した感がある。現代の目からみると剽窃のようにも思えるが、明治時代には先行作品を利用することはごく普通に行われていた。歌詞が漢詩をそのまま翻訳しているだけでなく、うたわれている内容も起承転結の展開をしており、絶句の構成そのものである。以下簡単な分析を試みる。

「磯の火細りて　更くる夜半に」を承けて「岩うつ波音　ひとり高し」と海辺の様子を歌い、次に「かかれる友舟　ひとは寝たり」と自然の様子から人事に転じる。結びに登場人物（作者）の心境が「たれにか　語らん　旅の心」とうたわれる。「旅泊」の四行の歌詞は絶句の起承転結と良く似た構成で作られている。二番の歌詞も張継の詩の起句を強く意識して「月影かくれて　からす啼きぬ」とはじまり、前半は周りの様子を歌い、転句では人が登場する。最後には夜が明けて横雲なびく晴れた朝空にほっとする気持ちで結んでいる。唱歌の多くは四行からなり、その多くは起承転結の構成である。四行の唱歌の場合、大和田建樹ら明治の人は絶句の構成を意識していたと考えられる。勿論、どの程度意識的であったかは個人差があろうが。

大和田建樹の略歴を『日本の唱歌』により、抜粋する。

大和田建樹（一八五七―一九一〇）国文学者で詩人。愛媛県の宇和島に出生。その藩校に学んだのち、広島外国語学校で英語を勉強した。上京後、大町桂月らの大学派に対して、野にある国文学者として知られた。（中略）彼の大きな業績は何といっても唱歌の作詞で、「哀れの少女」「旅泊」のような、他の人に先立って文学的な作品を公にした功は大きく、また、この本でも見られる通り、明治時代の唱歌の一番多くのものを作詞したのは、彼である。しかも、「鉄道唱歌」「散歩唱歌」その他長大なものが多く、どんな題材でも頼まれれば引き受けて作った（中略）早作りの名人で、長い歌詞をスラスラと作り、生涯に詠んだ和歌の数は一万数千首に及んだと伝える。

大和田建樹は、明治を代表する唱歌作詞者であるが、維新前は、愛媛県宇和島の藩校明倫館で、漢学を学んでいる。江戸末期に生まれた

明治人の常として、漢文の素養は十分にあった。国文もよくしたが、幼少期に学んだ漢学も彼の思考の根底にはあった。

早作りの名人であった大和田建樹は漢文を始め、先行作品をうまく利用することによって速詠、多作も可能になったのであろう。

三

先にも述べたが「旅泊」の曲は、後に「灯台守」の名の曲として小学生に歌われた。

『抒情歌愛唱歌大全集』（ビクターファミリークラブ）により、その歌詞と解説を挙げる。

灯台守　　勝承夫作詞

こおれる月かげ　空にさえて
ま冬のあら波　よする小島
思えよ　とうだいまもる人の
とうとき　やさしき愛の心

はげしき雨風　北の海に
山なすあら波　たけりくる
その夜も　とうだいまもる人の
とうとき誠よ　海を照らす

明治二十二年六月発刊の『明治唱歌（三）』に既にこのメロディが載っているが、この時は大和田建樹が書いた「旅泊」という題名がついていた。勝承夫作詞のこの歌は、戦後の昭和二十二年、文部省発刊の最後の教科書『五年生の音楽』に載ったもの。イギリスの曲といっても原題も作曲者もよく判らないが、感傷の豊かなメロディが大きな魅力になり、少年少女の心に訴えるものがあったのか、歌詞は変わったが明治、大正、昭和と歌い継がれてきた。

「旅泊」のイメージから抜け切れなかったのか、海辺の灯台守として作詞されている。「海辺・夜・月影・漁火（灯台）・波たかし（あら波）」等が「旅泊」と重なる。歌詞も起承転結の構成であり、前半で自然、後半は人事を歌う。この「旅泊」の曲は韓国の教科書にも載っているとのことで、韓国の留学生数人に聞くと全員知っていた。しかも、曲名は「등대지기」、日本語に訳せば「灯台守」になり、歌われている内容も「灯台守」に近いという。題名の一致、歌詞の内容の類似から、恐らく日本で歌われた「灯台守」が韓国に伝わったのであろう。かっての日本軍歌や唱歌も韓国や北朝鮮に伝わり、替え歌で歌われたという（安田寛氏『日韓唱歌の源流』音楽之友社）。イギリスの曲が明治時代に日本に伝わり、さらに朝鮮半島にも伝播していた。

結び

明治時代の人々は、陸続として入ってくる西洋の文化を大和言葉ではなく、漢語に置き代えて理解したことが多い。表意文字である漢語は、意味の伝達にも便利であり、江戸末に生を享け、各藩校で漢学を学んだ当時の知識人の共通語であった。西洋の文化を理解するにあたって、明治人は漢語を利用することによってより効率的に西洋文明を理解した。西洋の音楽に歌詞をつけるにあたっても、和歌的表現を利用することも多かったが、漢詩文の表現を利用して唱歌の歌詞を作り、西洋の曲に合わせて歌うということも大和田建樹等の唱歌にはよく見られる傾向である。音楽（唱歌）においても明治日本人が作り出した和洋中文化の融合の一斑が認められる。

付記

①本稿は、一海知義神戸大学名誉教授を長とする「読游会」（南宋陸游詩の輪読会）訪中の折り、浙江大学での「中国古典文学・書法学術交流中日連合検討会」（二〇〇〇年五月十日）において口頭発表したものである。

②大和田建樹作詞「あわれの少女」も原曲は、アメリカのフォスターの「遥かなるスワニー河」で、デンマークのアンデルセンの童話「マッチ売りの少女」に想を得た歌詞を作り、それを日本人が歌うというものであった。さらにその冒頭の「吹き捲く風は顔を裂き」の「顔を裂く」という珍しい表現は『唐詩三百首』にも収められている岑参の漢詩「走馬川行。奉送封大夫出師西征」（走馬川行。封大夫の師を出だして西征するを送り奉る。）の「半夜軍行戈相撥　風頭如刀面如割」（半夜軍行して戈相撥（はら）ふ、風頭は刀の如く面は割（さ）かるるが如し）等を利用しており、米・丁（デンマーク）・中・日の四国の文化が融合した和洋中折衷の文化と言える。「あわれの少女」に関しては、東アジア比較文化国際会議日本大会（二〇〇〇年十月十五日於国学院大学）において、「明治唱歌『あわれの少女』に見える和洋中折衷の文化―一九世紀の米・丁・中・日文化の融合―」の題目で口頭発表し、後に「東アジア比較文化研究」（第二号　二〇〇三年六月）に掲載。

③この曲が韓国でよく歌われていることについては、大手前女子大学（当時）の留学生金銀天さんから教示を得た。

＊「旅泊」の原曲はイギリスの曲というが、その曲名が不明なのはいかにも残念である。ご存じの方がいらっしゃれば、お教え願いたい。